

お金に対する心理的態度と幸福度の関係¹⁾

——アンケート調査による予備的分析——

山 根 智 沙 子*

1. はじめに

本稿は、お金に対する心理的態度を規定する因子構造をモデル化することを試み、それらの特徴を明らかにするとともに、幸福度との関係を考察する。

人々の幸福感はどのような要因で決まっているのであろうか。幸福感に関する研究は、古代ギリシャの哲学者アリストテレスからはじまり、医学、心理学、社会学、経済学などさまざまな分野でなされている。

経済学の分野においては、1970年代に Easterlin (1974) や van Praag (1971) などによって始められ、1990年代に急速に発達し、「幸福の経済学」として本格的に研究がなされるようになった²⁾。すでに、幸福度は、所得、基本属性(性別・年齢)、社会的属性(婚姻状況・家族構成・学歴・職業など)、個人選好(危険回避度・時間割引率・利他性など)、健康状態に加え、信条などさまざまな要因から影響を受けることが明らかにされている(Frey and Stutzer, 2002a, b)^{3,4)}。

信条のなかでも、宗教と幸福度の関係を考察した論文は数多く存在し、信仰心の深い人ほど幸福度が高いことが報告されている(Koenig et al. 2011; Rosmarin and Koenig, 2020)。

山根・山根・筒井(2008)では、「信条」として、「お金に対する態度」「競争心」「質素な生活」「宗教の信仰」の4つを考慮している。

しかしながら、これらの変数をコントロール変数として用いているだけで、これらの変数が幸福度にどのような影響を与えるのかは詳しく議論されていない。また、「お金に対する態度」として、「お金を貯めることが人生の目的だ」という問いのみを採用している。

一方、心理学の分野においては、「人々がお金に対してどのような意識や感情をもち、それによりどう行動するか」といったお金に対する意識・態度を定量化する研究は盛んに行われている。その代表的な尺度として、Yamauchi and Templer (1982) の MAS (Money Attitudes Scale: お金への態度指標) と、Furnham (1984) の MBBS (Money Beliefs and Behavior Scale: お金に対する信念と行動)、Tang (1992, 1993, 1995) の MES (Money Ethic Scale: お金の倫理尺度) の3つがあげられる⁵⁾。この尺度をもとに現在に至るまで様々な尺度が構築され、呼び方は異なるがいずれもお金に対するイメージやお金の使い方、お金に関する感情などを測るものであり内容は重複する部分も多い(渡辺・佐藤, 2010; Furnham, 2014)。さらに、これらのお金に対する心理的態度は、性別、文化、教育、政治的・宗教的価値観、信念などにより異なることが知られている(Furnham, 1984; Lim and Teo, 1997; Tang, 1993)。一般的に、男性は女性より、お金を達成や自由・権力といった認知的要素として捉える傾向があるのに対し、女性は男性より、不安などの感情的要素としてお金を捉える傾向にあることが示されている(Furnham et al. 2012; Gresham and Fontenot,

* 広島経済大学経済学部経済学科准教授

1989; Tang, 1992)。日本においても、少ないながらもお金に対する心理的態度の研究は存在する(原岡, 1990; 渡辺, 2014)。さらに、お金に対する心理的側面が金融リテラシーや金融行動に影響を及ぼすことも明らかにされている(山根・阿萬・本西, 2020; Aman et al. 2022)。

以上のことを踏まえ、本稿は、お金に対する心理的態度を因子分析によって定量化し、それが幸福度を規定する要因になり得るか否かを検証する。さらに、日本における宗教と幸福度の関係についても、考察を加えることとする。

本稿の残りの部分は、次のように構成される。次節では、本稿で用いたアンケート調査について説明し、3節では、お金に対する心理的態度と幸福度の関係を考察し、4節では本稿の結論をまとめる。

2. データ

2.1 アンケート調査の概要

本稿は、筆者を含む共同プロジェクトの一環として実施された独自のアンケート調査を用いる⁶⁾。この調査は、性別・都道府県・年齢構成が全国平均分布と近似するように構成されており、有効回答数は3,001人(男性:1,494, 女性:1,507人, 平均年齢:50.44歳, SD=15.73)である。また、お金に対する心理的態度や幸福度に関する質問に加え、学歴、職業、個人選好(時間、リスク、損失回避)、金融知識、両親の学歴や宗教など多岐にわたる項目を尋ねている。

本節では、本稿で用いる主な変数について述べていく。

2.2 お金に対する心理的態度の定量化

本稿では、Tang (1992, 1993, 1995) のお金の倫理尺度: MES (Money Ethic Scale) をもとに、お金に対する心理的態度の定量化を図る。Tang (1992) の MES は、感情的要素(善悪)、認知的要素(達成、勢力、自由)、行動的要素

(節約) から構成され、6下位尺度30項目の尺度であるが、Tang (1995) によって、MES をより使いやすく、より実用的にするため、30項目から12項目まで質問項目を絞った短縮版が作成されている。短縮版においても MES の妥当性は確認されているため、本稿では、短縮版を採用し、お金に対する心理的態度の定量化を試みる。

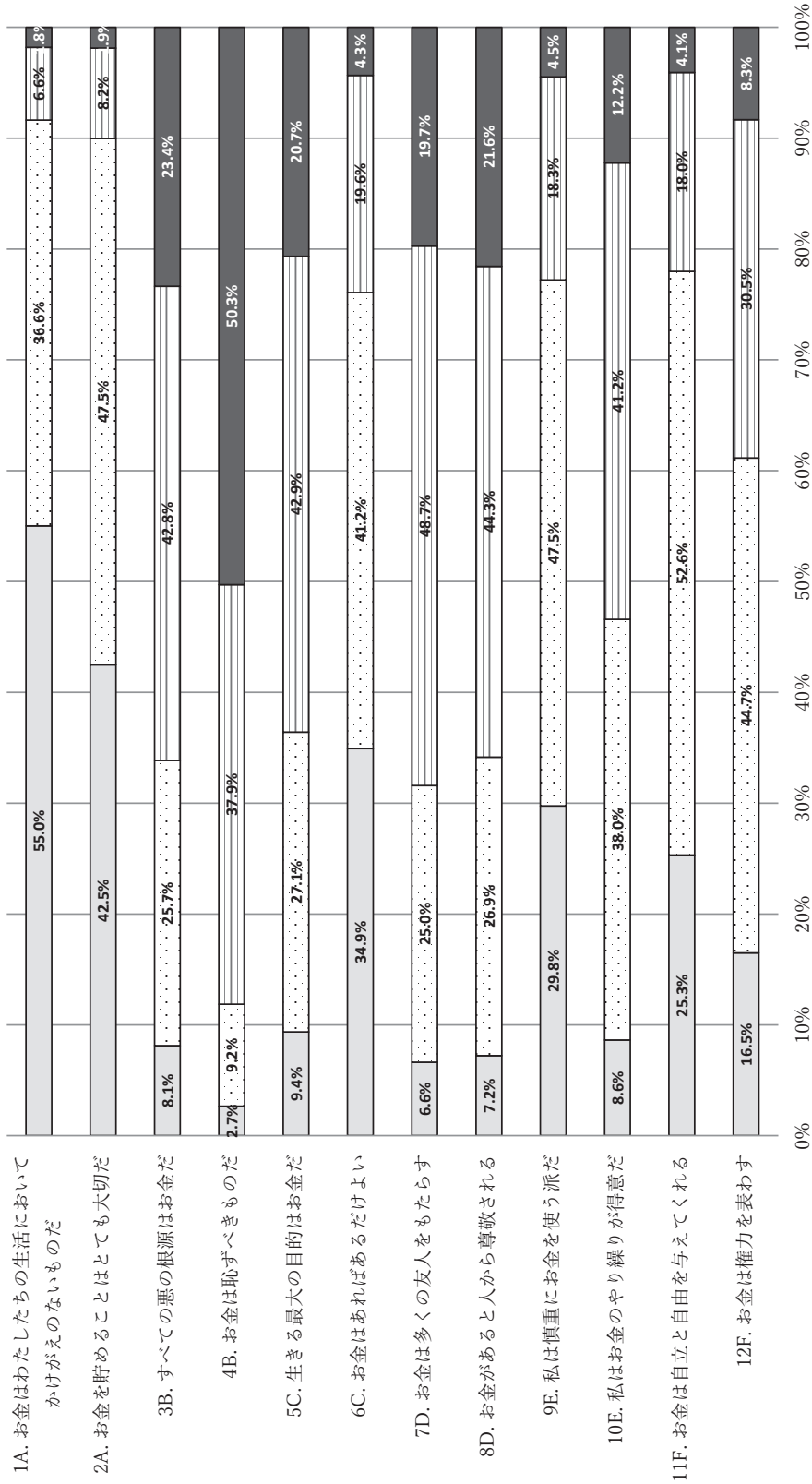
具体的には、「A. 善 (Good)」、「B. 悪 (Evil)」、「C. 達成 (Achievement)」、「D. 尊敬 (Respect)」、「E. 節約 (Budget)」、「F. 自由と権力 (Freedom/Power)」の6尺度12項目からなり、「そう思う(4点)」、「どちらかといえばそう思う(3点)」、「どちらかといえばそう思わない(2点)」、「そう思わない(1点)」の4肢択一で尋ねている。図1にアンケート集計結果を示している。この図を見ると、「1A. お金はわたしたちの生活においてかけがえのないものだ」の問いに、「そう思う」が55%を占めており、「どちらかといえばそう思う」にあたる割合を含めると、9割を超える。「2A. お金を貯めることはとても大切だ」についても、9割が好意的に受け止めており、全体としてお金に対して良いイメージを持っていることが示されている。

これらの調査結果を用いて因子分析を行ない、日本におけるお金に対する心理的態度を定量化していくことを試みていく。

2.2.1 因子分析

まず、12項目に対して因子分析(主因子法、スクリーンプロットにより因子数を決定、プロマックス回転)を行なった⁷⁾。ただし、「5C. 生きる最大の目的はお金だ」の因子負荷量は0.4未満であったため、これを削除し、再度、因子分析を行なった結果、4因子構造が妥当と判断した。11項目のクロンバックの α 信頼性係数は、0.729であり、内的整合性は一定の妥当性があることが示された。これらの結果を表1に示す。

第1因子は、「1A. お金はわたしたちの生活



□ そう思う □ どちらかかといえはそう思う □ どちらかかといえはそう思わない ■ そう思わない

注) すべて4段階評価(そう思わないを1, そう思うを4)で尋ねており, その単純集計の結果を示している。すなわち, 有効回答数3,001名のうち, 各選択肢が選ばれた割合を示している。質問は, 6項目「A. 善 (Good)」, 「B. 悪 (Evil)」, 「C. 達成 (Achievement)」, 「D. 尊敬 (Respect)」, 「E. 節約 (Budget)」, 「F. 自由と勢力 (Freedom/Power)」に分類され, 全12問からなる。

図1 「お金に対する心理的態度」の集計結果

表1 倫理尺度 (MES) 回転後の因子行列

項目	平均	SD	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4
Factor1: 善 ($\alpha=0.758$)						
1A. お金はわたしたちの生活において かけがえないものだ	3.45	0.70	0.748	-0.071	0.023	-0.003
2A. お金を貯めることはとても大切だ	3.31	0.70	0.721	-0.120	0.111	0.059
6C. お金はあればあるだけよい	3.07	0.85	0.574	0.194	-0.100	-0.010
11F. お金は自立と自由を与えてくれる	2.99	0.77	0.482	0.258	0.061	-0.098
Factor2: 目的手段 ($\alpha=0.733$)						
8D. お金があると人から尊敬される	2.20	0.86	0.024	0.748	0.030	0.018
7D. お金は多くの友人をもたらす	2.18	0.82	-0.039	0.726	0.045	-0.022
12F. お金は権力を表わす	2.69	0.84	0.359	0.406	-0.085	0.115
Factor3: 管理 ($\alpha=0.620$)						
10E. 私はお金のやり繰りが得意だ	2.43	0.81	-0.056	0.074	0.592	0.020
9E. 私は慎重にお金を使う派だ	3.02	0.81	0.196	-0.034	0.549	-0.020
Factor4: 悪 ($\alpha=0.624$)						
3B. すべての悪の根源はお金だ	2.19	0.88	0.138	-0.038	-0.053	0.617
4B. お金は恥ずべきものだ	1.64	0.76	-0.203	0.098	0.075	0.580
因子間相関			Factor2	0.275		
			Factor3	0.353	0.204	
			Factor4	-0.113	0.413	-0.007
						1.000
因子得点	平均	SD	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4
Factor1: 善	0.00	0.88	1.00			
Factor2: 目的手段	0.00	0.86	0.36***	1.00		
Factor3: 管理	0.00	0.73	0.52***	0.32***	1.00	
Factor4: 悪	0.00	0.75	-0.13***	0.55***	0.003	1.00

注) サンプル数は3,001。SD は標準偏差を表わす。各項目について、「そう思う」を4点、「どちらかといえばそう思う」を3点、「どちらかといえばそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点と配点し、平均値を算出している。因子数を4とし、Kaiserの正規化をともなう斜交回転(プロマックス)方による結果を示している。***は1%水準を表わす。

においてかけがえないものだ」「2A. お金を貯めることはとても大切だ」「6C. お金はあればあるだけよい」「11F. お金は自立と自由を与えてくれる」などで負荷量が高い。これらはお金を「良いもの」として捉えていることを表わすため、Tang (1992, 1993, 1995) にならない「善」に関する因子とする。

第2因子は、「8D. お金があると人から尊敬される」「7D. お金は多くの友人をもたらす」「12F. お金は権力を表わす」などで負荷量が高い。これらは、山根・阿萬・本西 (2021) にならない、お金を社会的・経済的なステイタスを

得るための手段として捉えていることを表わすと解釈し、「目的手段」と命名する⁸⁾。

第3因子は、「10E. 私はお金のやり繰りが得意だ」「9E. 私は慎重にお金を使う派だ」の2項目で負荷量が高く、第4因子は、「3B. すべての悪の根源はお金だ」「4B. お金は恥ずべきものだ」の2項目で負荷量が高い。これらはTang (1992, 1993, 1995) にならない、それぞれ「管理」と「悪」に関する因子とした。信頼性の検討のため、これら4つの因子(尺度)にそれぞれのクロンバック α 信頼係数を算出したところ、各下位尺度とも0.62以上であり内的

整合性がみられた。

各因子間の相関係数を表1の下段に示している。第1因子「善」は、第3因子「管理」と比較的相関が高く、第4因子「悪」とは負の相関を示している。

本稿では、因子構造の情報をそのまま用いることを重要と考え、因子負荷量をもとに「回帰法」で推定したプロマックス回転後の因子得点を分析に採用する⁹⁾。「回帰法」とは、因子得点係数の推定方法の1つであり、推定された因子得点と真の因子得点の誤差をできるだけ小さくすることを目的としている（得点の平均値は0）。これらの因子得点の記述統計と相関係数を表1の下段に示している。平均値0、標準偏差0.7以上と標準化された係数に近いことが確認できる。第1因子「善」は、第2因子「目的手段」、第3因子「管理」と1%水準で有意に正であり、第4因子「悪」と1%水準で有意に負である。第2因子「目的手段」は、第3因子

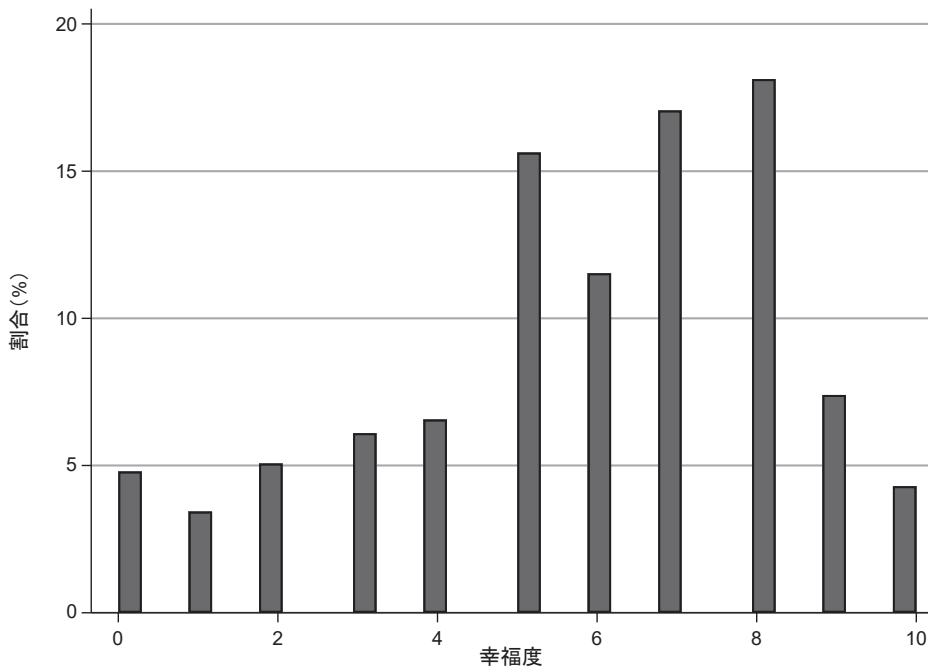
「管理」と、第4因子「悪」と1%水準で有意に正である。これらの結果は、因子相関とも山根・阿萬・本西（2021）の結果とも整合的である。

2.3 幸福度の測定

次に、幸福度について見ていく。このアンケート調査では、幸福度について次のように尋ねている¹⁰⁾。

「全体として、あなたは普段どの程度幸福だと感じていますか。「非常に幸福」を10点、「非常に不幸」を0点として、0から10までの10段階から1つ選んでください。」

この質問に対しての回答頻度を図2に示す。分布は全体に右に偏り、幸福な人が多いことがわかる（約6割の人が、5－8点と回答している¹¹⁾）。



注) 10段階評価の回答頻度を、総回答数3,001に対する比率で表している。

図2 幸福度の回答頻度

2.4 その他の変数：生まれ育った家庭環境

養育期における家庭環境が、子どものその後の成長に影響を及ぼすことは、教育学、社会学、心理学などさまざまな研究分野において指摘されている。家庭環境には、家族構成（母子家庭や父子家庭）や両親の学歴、所得、就労状況、経済的地位などさまざまなものが含まれるが、経済学においては、とりわけ親の所得に注目し、親の貧富が子どもへと世代間で引き継がれる可能性に関心が寄せられてきた（Solon, 1992; Zimmerman, 1992など）。つまり、家庭における教育投資の差が子どもの成果変数に大きな影響を与え、格差・不平等の連鎖をもたらす（Cunha and Heckman, 2007）¹²⁾。多くの研究が子どもの成果変数として、学歴や所得を取り上げているが、山根・筒井（2021）では、成果として幸福度を取り上げ、両親の学歴が幸福度に影響を及ぼすことを示している¹³⁾。

さらに、山根・阿萬・本西（2021 a, b）は、生まれ育った家庭環境がお金に対する心理的態度にも影響を及ぼすことを示している。彼らは、養育期の家庭環境が子ども金融知識の水準に影響することを明らかにした先行研究（Shim et al. 2010）に着目し、生まれ育った家庭環境がお金に対する心理的態度に影響を及ぼすか否かを

検証している。

そこで、本稿でも、生まれ育った家庭環境に着目をする。具体的には、両親の学歴と15歳のころの生活水準を用いる。これらの変数は交絡因子と呼ばれるもので、統計的因果推論を行なう際には、重要な変数である。

3. お金に対する心理的態度と幸福度

本節では、お金に対する心理的態度と幸福度の関係に加え、両者に影響を及ぼすと考えられる要因との関係について考察していく。具体的には、基本属性（性別・年齢）、社会的属性（学歴・婚姻）、所得、信仰心、さらに生まれ育った家庭環境（両親の学歴・15歳のころの生活水準）を採用する¹⁴⁾。

まず、これらすべての変数の記述統計を表2に、相関係数を表3に示す。

まず、各因子得点と幸福度の関係を見ると、4因子とも1%水準で有意であり、係数は小さいながらも「善」と「管理」とは正、「目的手段」と「悪」とは負の関係にある。これは、お金に対する心理的態度が幸福度の決定要因になり得ることを示している。特に注目したいのが、「善」と「悪」の係数であり、お金を良いものではなく悪いものとして捉えている、すなわち、

表2 分析に用いる変数の記述統計

	観測数	平均値	中央値	IQR
幸福度	3,001	5.79	6	4
男性	3,001	0.50	0	1
年齢	3,001	50.44	50	26
結婚	3,001	0.58	1	1
一人当たり所得（万円）	3,001	266.75	200	150
学歴（年数）	2,878	14.36	14	4
信仰心	3,001	1.49	1	1
父親の学歴（年数）	2,605	12.77	12	4
母親の学歴（年数）	2,630	12.14	12	2
15歳のころの生活水準	3,001	5.07	5	3

注) 各変数の正規性について Shapiro-Wilk 検定にて検定し、ほとんどの変数において棄却されたため、平均値と中央値、IQR（四分位範囲）を示している。因子分析によって得られた4つの因子得点については、表1の下段に示しているため省略している。

表3 各因子得点とお金に対する心理的態度、幸福度、生まれ育った環境等の相関係数

	因子				幸福度	所得
	Factor1. 善	Factor2. 目的手段	Factor3. 管理	Factor4. 悪		
幸福度	0.09***	-0.12***	0.17***	-0.18***	1.00	
一人当たり所得 (万円)	0.01	0.03*	0.06***	-0.01	0.07***	1.00
男性	-0.10***	0.08***	-0.04**	0.02	-0.14***	0.09***
年齢	-0.03*	-0.18***	0.02	-0.14***	0.24***	-0.03*
年齢の2乗	-0.04**	-0.18***	0.03	-0.13***	0.25***	-0.04**
結婚	0.01	-0.07***	0.02	-0.05***	0.30***	-0.13***
学歴 (年数)	-0.01	-0.03	0.06***	-0.07***	0.09***	0.26***
信仰心	-0.21***	0.17***	0.02	0.32***	-0.07***	0.03*
父親の学歴 (年数)	0.00	0.06***	0.03*	0.06***	0.02	0.15***
母親の学歴 (年数)	-0.01	0.10***	0.03	0.12***	-0.04**	0.12***
15歳のころの生活水準	0.11***	0.005	0.09***	-0.04**	0.43***	0.05***

注) *** は 1%水準, ** は 5%水準, * は 10%水準を表わす。紙面の節約のため、主な変数の相関係数のみを記載している。また、因子分析によって得られた4つの因子得点間の相関は、表1の下段に示している。

お金に対する禁忌感が強いほど幸福度は低い傾向にある。

次に、一人当たり所得を見ると、「管理」と1%水準で有意に正、10%ながらも「目的手段」と有意に正を示している。すなわち、感情的要素(善・悪)ではなく、認知的要素と関係があることがわかる。また、所得と幸福度については、多くの先行研究が示しているとおり、係数は小さいながらも1%水準で有意に正を示している(Frey and Stutzer, 2002 a, b)¹⁵⁾。

次に、信仰心を見ると、「管理」を除いて3つの因子と1%水準で有意であり、「善」とは負、「目的手段」「悪」とは正の関係にある。幸福度とは、1%水準で有意に負であり、信仰心が強いほど幸福度が低い傾向にある。これは、多くの先行研究とは異なる結果である。

生まれ育った家庭環境を表わす、両親の学歴と15歳のころの生活水準を見ていこう。まず、各因子得点と両親の学歴は、「善」を除いて同じ符号を示している。「目的手段」と「悪」は1%水準で両親の学歴と正の関係にあり、母親の係数の方が大きい。すなわち、お金に対する心理的態度は母親の影響を大きく受ける傾向に

ある。この結果は、山根・阿萬・本西(2021a, b)とも整合的である。幸福度との関係を見ると、父親の学歴は正の符号を持つが有意ではない。母親の学歴は1%水準で有意に負である。所得に対しては、いずれも1%水準で有意に正であり、多くの先行研究と同様に、両親の貧富が子どもへと世代間で引き継がれる可能性を示唆している。

さらに、強い影響を持つのが、15歳のころの生活水準であり、幸福度とは1%水準で0.43と相対的に他の変数より強い相関を示している。一方、所得とは1%水準で有意ではあるが、0.05と係数は非常に小さい。また、お金に対する心理的態度とも相関を示しており、「善」と「管理」と1%水準で有意に正、「悪」と5%水準で有意に負の関係にある。

最後に、基本属性(年齢・性別)と社会的属性(結婚・学歴)を各因子得点との関係を見ると、男性の方が女性よりお金を目的手段と捉えているのに対し、女性はお金をより良いものだと捉えていることが分かる。ただし、山根・阿萬・本西(2021a)によると、これらの影響は年齢によって異なることが示されており、相関

係数のみでは判断が難しい。学歴は、「管理」と1%水準で有意に正、「悪」と1%水準で有意に負の符号を持つ。結婚は、「取引手段」「悪」と1%水準で有意に負の関係にある。これらの結果は、先行研究と概ね同じである。

4. おわりに

本稿は、日本人のもつお金に対する心理的態度を定量化し、それらの特徴を明らかにするとともに、幸福度との関係を考察した。具体的にはアンケート調査を実施し、Tang (1992, 1993, 1995) のMES尺度をもとに因子分析を行ない、日本人のお金に対する心理的態度に4つの共通因子(善, 目的手段, 管理, 悪)を抽出した。そして、それらの因子と幸福度、さらには両変数を定義するその他の変数との相関を示した。その結果、(1) お金に対する禁忌感が高い人は幸福度が低い、(2) 信仰心が強い人はお金に対する禁忌感が強く、幸福度も低い、(3) 生まれ育った環境は、お金に対する心理的態度や幸福度に影響することを確認した。

本稿には、その他にいくつかの課題が残されている。第1に、本稿の分析は、日本人のお金に対する心理的態度と幸福度の相関分析しかしとておらず予備的分析に留まっている。すなわち、変数間の関係の符号を確認したに過ぎず、今後はより高度な計量分析を行なう必要がある。その際、重要となるのは推定モデルの選定であろう。例えば、生まれ育った家庭環境は、幸福度に直接、影響するが、お金に対する心理的態度を通して間接的にも幸福度に影響すると考えられる。すなわち、お金に対する心理的態度も成果変数の1つであり、成果変数の識別の問題が生じる。そのため、単にお金に対する心理的態度と生まれ育った家庭環境を表わす変数を幸福度に回帰する式(誘導形)を推定するだけでは総合効果しか得られない¹⁶⁾。より詳細な関係を考察するためには、逐次形あるいは構造形推

定、パス解析(完全情報最尤法)などを行ない、直接効果と間接効果を分けて検証する必要がある。

第2に、お金に対する心理的態度を測定する尺度の問題がある。本稿が採用したTangのMESは「善」と「悪」というお金に対する倫理観を測るように設計されている。しかしながら、Tang (1993)も指摘しているとおり、国や文化が異なる地域を対象に調査する場合は、文化的背景を十分に考慮する必要がある。すなわち、心理学研究の伝統的な枠組みを超え、日本独自の尺度を作成する必要がある。すでに、Slecza et al. (2020)は、既存の尺度のいずれか1つを採用するのではなく、複数の尺度を用いてドイツにおける新しい独自の尺度を開発している。一方、Lay and Furnham (2019)は、国際的に使用できる新しい尺度を開発し、その妥当性を示している。

以上、本稿が示した予備的分析の結果をもとに、計量的にさらなる詳細分析を行なうこと、日本独自の信条や習慣を取り入れ、新しいお金に対する心理的尺度を開発することを今後の課題としたい。

謝辞：本稿の用いたアンケートデータは、阿萬弘行氏(関西学院大学)、本西泰三氏(関西大学)、春日教測(甲南大学教授)と共同で実施したアンケート調査結果を活用しており、記して感謝申し上げたい。

注

- 1) 本研究は、公益財団法人石井記念証券研究振興財団より助成を受けている。
- 2) 1997年11月の*Economic Journal*第107巻の特集、2000年に発刊された*Journal of Happiness Studies*の論文を参照されたい。
- 3) 主観的幸福度を経済学で用いることは是非については、筒井(2009)を参照されたい。
- 4) サーベイ論文としては、Kahneman et al. (1999), Bruni and Porta (2006)なども参照されたい。また、日本を対象とした研究としては、Ohtake and Tomioka (2004), 筒井・大竹・池田(2009), Tsutsui et al. (2010), Lee and Ono (2008)などがある。

- 5) 既存の「お金に対する態度」の尺度については、渡辺・佐藤 (2010) や Lay and Furnham (2019) を参照されたい。渡辺・佐藤 (2010) では8つの、Lay and Furnham (2019) では21の尺度について、それぞれ作成された年代に沿って各特徴をまとめている。
- 6) 具体的には、2020年12月23日から28日の6日間でインターネット調査を実施した (マイボスコム社に依頼)。
- 7) 因子間に相関があることを仮定する斜交回転 (プロマックス回転) を行ない、すべてではないが一部の因子間に相関があることが示されたため、プロマックス回転を採用した。確認のため、バリマックス回転でも推定したが、ほぼ同じ結果が得られた。
- 8) 山根・阿萬・本西 (2021) は、短縮版ではなく6尺度30項目のMESを用いてお金に対する心理的態度を定量化している。サンプル数は3,601と本稿が採用したアンケート調査とほぼ同じ規模である。本稿の因子分析でも、彼らとほぼ同様の結果が得られていることから、TangのMES短縮版の妥当性を確認できた。
- 9) 第1因子は4項目、第2位因子は3項目、第3、第4因子は2項目と、各因子によって項目数が異なるため、頑健性チェックとして、項目平均値についても確認をすることとする。
- 10) 幸福度の測り方については、大坂大学COEが実施したアンケート調査「くらしの好みと満足度についてのアンケート」で用いられた質問項目を採用した。
- 11) 大阪大学COEのアンケート調査に比べ、全体的に幸福度が低い。例えば、山根・山根・筒井 (2008) によると、2003年から2006年までのプールデータの場合、4点以下は全体の約13~14%にすぎないが、本稿が用いた調査では、その倍の約26%にも上る。もちろんアンケート調査の実施の仕方や調査対象者、実施時期の違いを考慮する必要があるが、コロナ禍の影響があるかも知れない。この点については、今後の検証課題としたい。
- 12) 小原・大竹 (2009) は Haveman and Wolfe (1995)、Leibowitz (1974) をもとに、親の行動や家庭環境が子どもの教育成果に与える影響の経路を大きく3つにわけて議論している (p. 68, 図1: 親の行動と子どもの教育成果)。
- 13) 彼らは、親の学歴が幸福度に与える影響を直接と間接に分けて分析を試みている。例えば、親の学歴は、多くの先行研究が示しているように、子どもの学歴・所得に影響を及ぼす。その結果、高い学歴・所得が幸福度を押し上げるといったように、間接的にも影響を及ぼすと考えられる。
- 14) これらの変数の定義は、補論を参照されたい。
- 15) ただし、時系列的に平均幸福度と平均所得の間には相関関係がないことが知られている (幸福のパラドックス, Eastelin 1974)。
- 16) 実際、お金に対する心理的態度と生まれ育った家庭環境を説明変数、被説明変数を幸福度としOLS推定を行なったところ、相関係数と整合的

な結果が得られた。

参考文献

- Aman, H., Motonishi, T., & Yamane, C. (2022). *Financial Ethics and Risky Assets Investment: Evidence from Households in Japan*.
- Bruni, L., & Porta, P. L. (2006). Economics and Happiness: Framing the Analysis. In *Economics and Happiness: Framing the Analysis*. <https://doi.org/10.1093/0199286280.001.0001>
- Cunha, F., & Heckman, J. (2007). The technology of skill formation. *American Economic Review*, 97 (2). <https://doi.org/10.1257/aer.97.2.31>
- EASTERLIN, R. A. (1974). Does Economic Growth Improve the Human Lot? Some Empirical Evidence. In *Nations and Households in Economic Growth*. <https://doi.org/10.1016/b978-0-12-205050-3.50008-7>
- Frey Bruno S., & Stutzer Alois. (2002). *Happiness and Economics*. Princeton UP.
- Frey, B. S., & Stutzer, A. (2002). What can economists learn from happiness research? *Journal of Economic Literature*, 40(2). <https://doi.org/10.1257/jel.40.2.402>
- Furnham, A. (1984). Many sides of the coin: The psychology of money usage. *Personality and Individual Differences*, 5(5). [https://doi.org/10.1016/0191-8869\(84\)90025-4](https://doi.org/10.1016/0191-8869(84)90025-4)
- Furnham, A. (2014). The new psychology of money. In *The New Psychology of Money*. <https://doi.org/10.4324/9780203506011>
- Furnham, A., Wilson, E., & Telford, K. (2012). The meaning of money: The validation of a short money-types measure. *Personality and Individual Differences*, 52(6). <https://doi.org/10.1016/j.paid.2011.12.020>
- Gresham, A., & Fontenot, G. (1989). The differing attitudes of the sexes toward money: An application of the money attitude scale. *Advances in Marketing*, 380-384.
- Haveman, R., & Wolfe, B. (1995). The determinants of children's attainments: A review of methods and findings. *Journal of Economic Literature*, 33 (4).
- Kahneman Daniel, Diener Ed, & Shwarz Norbert. (1999). *Well-Being: The foundations of hedonic psychology*. Russell Sage Foundation.
- Koenig, H., McCullough, M., & Larson, D. (2011). Handbook of Religion and Health. In *Handbook of Religion and Health*. <https://doi.org/10.1093/acprof:oso/9780195118667.001.0001>
- Lay, A., & Furnham, A. (2019). A new money attitudes questionnaire. *European Journal of Psychological Assessment*, 35(6). <https://doi.org/10.1027/1015-5759/a000474>
- Lee, K. S., & Ono, H. (2008). Specialization and hap-

- piness in marriage: A U.S.-Japan comparison. *Social Science Research*, 37(4). <https://doi.org/10.1016/j.ssresearch.2008.02.005>
- Leibowitz, A. (1974). Home Investments in Children. *Journal of Political Economy*, 82(2, Part 2). <https://doi.org/10.1086/260295>
- Lim, V. K. G., & Teo, T. S. H. (1997). Sex, money and financial hardship: An empirical study of attitudes towards money among undergraduates in Singapore. *Journal of Economic Psychology*, 18(4). [https://doi.org/10.1016/S0167-4870\(97\)00013-5](https://doi.org/10.1016/S0167-4870(97)00013-5)
- Ohtake, F., & Tomioka, J. (2004). Who supports redistribution? *Japanese Economic Review*, 55(4). <https://doi.org/10.1111/j.1468-5876.2004.00318.x>
- Rosmarin, D. H., & Koenig, H. (2020). Handbook of Spirituality, Religion, and Mental Health. In *Handbook of Spirituality, Religion, and Mental Health*. <https://doi.org/10.1016/B978-0-12-816766-3.00012-4>
- Shim, S., Barber, B. L., Card, N. A., Xiao, J. J., & Serido, J. (2010). Financial Socialization of First-year College Students: The Roles of Parents, Work, and Education. *Journal of Youth and Adolescence*, 39(12). <https://doi.org/10.1007/s10964-009-9432-x>
- Slecza, P., Braun-Michl, B., & Kraus, L. (2020). Gamblers' attitudes towards money and their relationship to gambling disorder among young men. *Journal of Behavioral Addictions*, 9(3), 744–755. <https://doi.org/10.1556/2006.2020.00042>
- Solon, G. (1992). Intergenerational income mobility in the United States. *American Economic Review*, 82(3).
- Tang, T. L. (1992). The meaning of money revisited. *Journal of Organizational Behavior*, 13(2). <https://doi.org/10.1002/job.4030130209>
- Tang, T. L. (1993). The meaning of money: Extension and exploration of the money ethic scale in a sample of university students in Taiwan. *Journal of Organizational Behavior*, 14(1). <https://doi.org/10.1002/job.4030140109>
- Tang, T. L. P. (1995). The development of a short Money Ethic Scale: Attitudes toward money and pay satisfaction revisited. *Personality and Individual Differences*, 19(6). [https://doi.org/10.1016/S0191-8869\(95\)00133-6](https://doi.org/10.1016/S0191-8869(95)00133-6)
- Tsutsui, Y., Kimball, M., & Ohtake, F. (2010). Koizumi carried the day: Did the Japanese election results make people happy and unhappy? *European Journal of Political Economy*, 26(1). <https://doi.org/10.1016/j.ejpoleco.2009.08.002>
- van Praag, B. (1971). The welfare function of income in Belgium: An empirical investigation. *European Economic Review*, 2(3). [https://doi.org/10.1016/0014-2921\(71\)90045-6](https://doi.org/10.1016/0014-2921(71)90045-6)
- Yamauchi, K. T., & Templer, D. I. (1982). The Development of a Money Attitude Scale. *Journal of Personality Assessment*, 46(5). https://doi.org/10.1207/s15327752jpa4605_14
- Zimmerman, D. J. (1992). Regression Toward Mediocrity in Economic Stature. *American Economic Review*, 82(3).
- 筒井義郎 (2009) 「幸福の経済学は福音をもたらすか？」『行動経済学』2(2), 1–21.
- 筒井義郎・大竹文雄・池田新介 (2009) 「なぜあなたは不幸なのか」『大阪大学経済学』58(4), 20–57.
- 原岡一馬 (1990) 「お金に対する態度と価値志向Ⅰ—態度の構造と態度尺度の構成—」『名古屋大学教育学部紀要教育心理学科』37, 199–216.
- 山根智沙子・阿萬弘行・本西泰三 (2021a) 「お金に対する心理的態度と金融知識の関係：アンケート調査の予備的分析」『季刊 個人金融』16(2), 82–96.
- 山根智沙子・阿萬弘行・本西泰三 (2021b) 「大学生のお金に対する禁忌感の意識調査：金融リテラシー・家庭環境との関係」『証券経済学会年報』56, 63–77.
- 山根智沙子・山根承子・筒井義郎 (2008) 「幸福度で測った地域間格差」『行動経済学』1, 1–26.
- 渡辺信子 (2014) 「大学生用お金に対する信念尺度の作成」『応用心理学研究』41, 11–22.
- 渡辺信子・佐藤有耕 (2010) 「お金に対する態度に関する心理学的研究の動向」『筑波大学心理学研究』40, 61–71.

補論 アンケート調査票と変数の定義

アンケート 質問項目

【社会的属性】

学歴（年数）	以下の6つから回答。これらを年数に変換。 1. 小中学校 卒業（尋常小学校、高等小学校を含む） 2. 高等学校 卒業（旧制中学校、女学校、実業学校、師範学校を含む） 3. 短期大学 卒業（高専等を含む） 4. 四年制大学 卒業（旧制高校、旧制高等専門学校を含む） 5. 大学院修士課程 修了（六年生大学を含む） 6. 大学院博士課程 修了
結婚	結婚しているを1、していない（未婚）を0とするダミー変数
所得	家庭の世帯収入を1. 300万円未満, 2. 300~500万円未満, 3. 500~700万円未満, 4. 700~1,000万円未満, 5. 1,000~1,500万円未満, 6. 1,500万円以上の選択肢で尋ね、世帯人数で徐して算出。
信仰心	「宗教を熱心に信仰している」という問いに対して、「ぴったりと当てはまる」を4点、「全く当てはまらない」を1点として定義。

【家庭環境】

両親の学歴	以下の7つから回答 「不明」を除いて、年数に変換。 1. 小中学校 卒業（尋常小学校、高等小学校を含む） 2. 高等学校 卒業（旧制中学校、女学校、実業学校、師範学校を含む） 3. 短期大学 卒業（高専等を含む） 4. 四年制大学 卒業（旧制高校、旧制高等専門学校を含む） 5. 大学院修士課程 修了（六年生大学を含む） 6. 大学院博士課程 修了 7. 不明
15歳のころの生活水準	「あなたが15歳のころ、あなたのご家庭の生活水準」はどの程度だったとお考えですか、という問いに対して、「もっとも豊か」を10点、「もっとも貧しい」を0点として定義。